

機関番号：3 2 6 4 1

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720113

研究課題名（和文）19 世紀中国における翻訳語の研究

研究課題名（英文）Research on Modern Neologisms in Chinese

研究代表者：

千葉謙悟（CHIBA KENGO）

中央大学・経済学部・助教

研究者番号：70386564

研究成果の概要（和文）：

3 年間の研究期間中に 7 件の学会発表、8 本の論文および単著 1 冊を公刊することができた。うち学会発表 7 件全てが国際的な集まりにおける発表であり、4 回は海外における成果発信であった。論文は査読誌に 2 本掲載された。また中国語論文により成果を海外に発信できた。単著は今回の研究成果をも反映させたものであり北京外国語大学の朱京偉氏による書評（『東方』2010 年 5 月）が掲載されるなど反響を得た。

研究成果の概要（英文）：

In 3 years period of the research aid, I published a book from Sanseido and 8 theses, also read 7 papers at the international conferences. My book had repercussions, for example, Zhu Jingwei, professor of Beijing University of Foreign Studies, published a review on *Tbho* (May, 2010) and introduced results by the research. Of my theses, 2 articles were published on refereed journal. Of these papers, 4 papers were presented abroad.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：翻訳語、意識語、音訳語、言語文化交流、中国語

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は 19 世紀の漢字翻訳語の定着家庭について公撒を試みるものである。日本における翻訳語研究は日本語学において戦前よりの蓄積を有し大きな進歩を遂げている。例えば森岡健二（1991）『近代語の成立 語彙編』（明治書院）が挙げられよう。

これには明治維新前後における日本語近代語彙成立との関連という要素が大きい、そ

の結果、少なからぬ翻訳語は日本で創造されたものではなく、その源をたどると中国に行きつくという事実も明らかになった。

しかしこの事実が突き止められたことによって、日本語学からのアプローチには限界があることもまた明らかとなった。すなわち、近代翻訳語の由来を研究するに当たっては中国側資料をあつかわねばならず、そのためには中国語学の知識と方法が求められるか

らである。

さらに、19世紀中国において翻訳語を創造したのは中国人ではなく実は中国にやってきた宣教師たちであったという事実も重要である。宣教師たちは中国人が彼らの言語を学ぶ気がない故に、彼らの宗教を宣伝すべく漢文あるいは中国語（諸方言）での著述・説教を余儀なくされた。宗教への興味をかき立てるために科学技術や社会制度の紹介も積極的になされた。実は日本や中国で現在用いられる翻訳語のすくなからぬ部分は彼ら来華宣教師の創造にかかるものなのである。

このことは、翻訳語研究において来華宣教師による漢文西学書資料および欧米語による資料（以下「欧米資料」という）が書かせないということを意味している。内田慶市（2002）『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版会）はこの方面における最近の代表的な論考と言えるだろう。

以上のような状況を踏まえ、研究会士の背景としては日中の資料を広く用いて翻訳語研究を進めるという着想を得、それを博士論文において実践したということが挙げられる。本研究では申請者のこれまでの研究による基礎の上に、19世紀中国における翻訳語の創造過程にまつわる問題についてアプローチするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は19世紀中国において創造された翻訳語の、現在に至るまでの意味変化を対象とする。その中でもこれまで相対的には深い検討が成されてこなかった欧米資料を中心に新たな成果を挙げることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究を遂行するに当たっては第一段階としてこの翻訳語の語誌を積み重ねることが必要である。

従って研究期刊内において複数の語誌を蓄積することによって、最終年度には中国で創造された翻訳語がどのような特徴を有しているのかについて帰納する。

本研究の特色は研究目的の独自性にある。これまでの翻訳語研究は当該語の語誌記述に終始し、創造及び定着過程の描写こそ蓄積されていたもののそれらに共通する「類型」を見いだすには至らない嫌いがあった。

本研究では荒川清秀（1997）『近代日中用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』（白帝社）に触発され、翻訳語が現在の意味を獲得するまでの意味変化を複数の語誌の蓄積から機能して類型化することを狙っている。

また扱う資料の広範さも本研究の独自性を高めている。これまでの翻訳語研究は英華字典（英語-中国語または中国語-英語の対訳

辞書）にせよ漢文西学書にせよ、プロテスタント宣教師=英語圏出身者よる資料が大きな比重を占めてきた。たしかに英語が近代語彙交流に果たした役割は巨大ではあるが、プロテスタントとカトリックの来華宣教師の間には中国語研究の成果の相互利用が成されていたことが明らかである。カトリックは非英語圏の出身者が多く、その言語も多岐に亘る。

この事実を踏まえるとき、英語資料だけでは翻訳語の創造・交流過程を跡づけるには十分ではない。

このような研究上の感激に着目し、本研究ではカトリック側に多いフランス語やラテン語などの資料をも視野に入れた研究を行う。

つまり本研究では資料の記述言語の制約を超え、中国語における翻訳語の定着過程をより詳細に跡づけ、かつその類型をより精密に機能することを目的としている。

## 4. 研究成果

### <2008年度>

1. 意識語に関して。第一に論文「中国語における「聯邦」-語誌および関連訳語をめぐって」において「聯邦」の語誌を記述した。

「聯邦」は来華宣教師の創造にかかる意識語である。この語が日本における状況とは異なり、中国においてはその政治的状況をふまえて「民主」「共和」といった翻訳語と緊密な連携を結ぶようになった様相を解明した。

第二に宗教用語として「奇蹟」の語誌を論文「神は漢字を嘉したもう—<奇蹟>の訳語をめぐって—」において記述した。

この語はキリスト教の基本用語の一つであり、現代生活でも常用される語であるにもかかわらずその出自は明らかになっていない。

中国では「聖蹟」「靈跡」が20世紀初まで用いられていたが、1890年代に日本で定着した「奇蹟」が導入されて1930年代には中国においても定着することとなった。

この研究では20世紀前半における日中間の語彙交流の様相を解明し、「聖」「靈」から「奇」への変更という形態素の切り替えによるmiracle理解の日中における差異についても指摘した。

2. 音訳語に関しては論文「音訳語における字義の影響-ワシントンおよびナポレオンの語形から-」においてナポレオンおよびワシントンの語形の変遷を記述し、現在の語形が定着した要因を解明した。

「華盛頓」「拿破侖」という音訳語が定着した背景として、各方言における読音差の相対的な小ささが語形の定着につながったことと、彼らの伝記から見られるイメージが漢字の選択に影響した可能性を指摘した。

3. 近代翻訳語の来源の一つとなったと推測されるピジン英語のテキストについて論文「"真の"英語を求めて-19世紀中国におけるピジンと英語教科書-」にて、英語母語話者のピジン撲滅の意思が英語テキストに見られることを指摘した。

上記 1.2. に関して国際シンポジウムに参加し研究成果を発表した。それぞれ「"真の"英語を求めて -19世紀中国におけるピジンと英語教科書-」「米国" 還是" 美国"? : 伝教士出版機構対外国地名書写的影響」「「奇跡」の語誌-20世紀前半の日中語彙交流」であり、成果を海外に発信した。

#### <2009年度>

1. これまでの科研費等による研究成果を踏まえ単著『中国語における東西言語文化交流 —近代翻訳語の創造と伝播』(東京:三省堂, 2010年2月20日)を出版した。中国語学の側から翻訳語をとりあげて研究した数少ない単著である。

アジアの近代は翻訳語と共に幕を開けたが、本書は従来主流であった意識語研究だけでなく音訳語をも研究の射程に収めることにより、近代中国翻訳語の創造・伝播の諸相を浮かび上がらせようとしたものである。

本書第一部では翻訳語研究の前提となる語の分類や音訳語の基礎方言判定のための方法論などを検討した。

第二部は本書の中心の一つである。ここでは第一に音訳語に焦点を当て、音訳語の基礎方言の移動につれて語形も変化していく「基礎音系シフト」とそれにまつわる「広州音脱落モデル」を提示した。第二に「牛津(Oxford)」「劍橋(Cambridge)」のようないわゆる意識地名についてその発想が中国人のものであることを論証した。第三に音訳語にも意識語と同様な日中語彙交流の回路が開かれていたことを指摘した。音訳語に対する本格的な検討は管見の限り本書で始めてなされたといつてよい。

第三部は同じく本書の核を成す部分であり、意識語を検討対象としている。ここでは第一にこれまで知られていなかった日中語彙交流の類型を指摘した。すなわちそれが中国の漢字音に影響を与えるというパターンである。第二に翻訳語「合衆国」を検討することで来華宣教師による翻訳語の語構成は漢字文化圏の人々の常識を越えるものでありうることを明らかにした。第三に、その認識のずれが「合衆国」イメージに与えた影響を検討した。

本書は以上のように翻訳語を巡るさまざまな新しい事象を発見・検討し高い評価を得ている。例えば北京外国語大学の朱京偉氏による書評(『東方』2010年5月)を参照されたい。

2. 意識語「奇跡」をめぐる語誌を論文「訳語「奇跡」と日中語彙交流」において記述し発表した。

キリスト教用語の研究は前年度からスタートさせているが、それを論文として一つの形にまとめたことになる。「奇蹟」を初めとするキリスト教用語の一部は現代の日常生活でも使用頻度の高い語でありながらその来歴が検証されていなかったため、本論文ではその基礎作業を行った。

3. 翻訳語研究の基礎となる来華宣教師たちの活動について研究成果を発表した。

一つは後世の翻訳語に絶大な影響を与えた『英華字典』(1866-1869)を著したロプシャイトに代表されるドイツ人宣教師についての研究であり、ボン大学におけるシンポジウムで「19-20世紀德国汉学家对中国语言研究的贡献」と題して発表した。

もう一つは18世紀のフランス人来華宣教師プレマールについての研究である。プレマールの著書である中国語文法書 *Notitia Linguae Sinicae*(1720)をめぐる研究を関西大学におけるシンポジウムで「18世紀の中国語と中国語教育 —来華宣教師プレマールの見た中国語」と題して発表した。

#### <2010年度>

第一に19世紀中国語における音訳語全般の状況に関してそれを掲載したメディアとの関連を探る論文「19世紀音訳語の資料・特徴・交流 —中国語の文体変容の前段階-」を発表した。ここでは19世紀中国における翻訳語の主要な特徴がメディアという基準である程度描き出せることを示した。

第二に19世紀の中国人カトリック信徒郭連城によって表された洋行記『西遊筆略』について「欧行記・文化交流・翻訳語 —郭連城『西遊筆略』(1863)初探-」を発表し、『西遊筆略』にみえる翻訳語を中心に分析した。

洋行記にみえる翻訳語について従来の研究が『走向世界叢書』所収のものを主たる対象としていたのに対し、ここではそれ以外の文献に目を向け、通時的な語誌記述のための基礎を築いた。また中国人による意識語創造パターンについても基礎的な検討を加えている。

第三に、翻訳語研究の基礎となる来華宣教師たちの活動についても研究成果を発表した。以前に引き続き18世紀のフランス人来華宣教師プレマールについてその著書である中国語文法書 *Notitia Linguae Sinicae*(1720)のラテン語原典からの翻訳を連載した。このまたその翻訳を基礎として、プレマールによる中国語に対する観察につきローマ大学における「“欧洲人的漢語研究歴史”国際研討会暨世界觀語教育史研究学会第三屆年会」で発表した。

これらの研究成果は当初の目標である中国語における翻訳語生成過程の類型化およびその日本語との比較のために基礎を築いたということが出来る。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 千葉謙悟、19 世紀音訳語の資料・特徴・交流 —中国語の文体変容の前段階、沈国威編著『言語の接触と変異』査読無、2011、掲載決定
- ② 千葉謙悟、欧行記・文化交流・翻訳語 —郭連城『西遊筆略』(1863)初探—、中央大学政策文化研究所編『学際的中国研究の探求』査読無、2011、掲載決定
- ③ 千葉謙悟、“米国”還是“美国”? :伝教士出版機構対外国地名書写的影響、復旦大学歴史系・出版博物館編『上海出版史会議論文集』、査読有、2010、pp.500-507
- ④ 千葉謙悟、訳語「奇跡」と日中語彙交流、或問 16 号、査読無、2009、pp.19-32
- ⑤ 千葉謙悟、“真の”英語を求めて—19 世紀中国におけるピジンと英語教科書—、内田慶市・沈国威編『言語接触とピジン —19 世紀の東アジア』、査読無、2009、pp. 99-120
- ⑥ 千葉謙悟、中国語における「聯邦」-語誌および関連訳語をめぐる、沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成・創出と共有』、査読無、2008、pp.213-244
- ⑦ 千葉謙悟、神は漢字を嘉したもう—<奇蹟>の訳語をめぐる—、アジア遊学 115 号、査読無、2008、pp.154-157
- ⑧ 千葉謙悟、音訳語における字義の影響—ワシントンおよびナポレオンの語形から—、中国文学研究 34 期、査読有、pp.16-31

[学会発表] (計 7 件)

- ① CHIBA, Kengo, Premare's Notitia Linguae Sinicae and Chinese Education in the 18th Century, 2010 年 9 月 13 日、“欧洲人的漢語研究歴史”国際研討会暨世界觀語教育史研究学会第三屆年会、Università degli Studi di Roma "La Sapienza"
- ② 千葉謙悟 接受外語的第一階段 —19 世紀漢語中的音訳詞、言語の接触と変容 —中国語の近代的变化と外国語、2010 年 8 月 1 日、関西大学
- ③ 千葉謙悟 18 世紀の中国語と中国語教育 —来華宣教師プレマールの見た中国語、第二回次世代国際学術フォーラム、2009 年 12 月 12 日、関西大学
- ④ 千葉謙悟 19—20 世紀德国汉学家对中国语言研究的贡献、德国汉学百年 —歴史・方

法・前瞻」国際研討会、2009 年 6 月 4 日、Universität Bonn

- ⑤ 千葉謙悟「奇跡」の語誌—20 世紀前半の日中語彙交流、漢字文化圏近代言語文化交流研究、2009 年 3 月 27 日、天津外国語学院
- ⑥ 千葉謙悟 米国“還是”美国”? : 伝教士出版機構対外国地名書写的影響、歴史的的中国出版与東亜文化交流国際学術研討会、2008 年 11 月 8 日、復旦大学
- ⑦ 千葉謙悟、“真の”英語を求めて —19 世紀中国におけるピジンと英語教科書—、ピジンの諸相、2008 年 10 月 10 日、関西大学

[図書] (計 1 件)

- ① 千葉謙悟、三省堂、中国語における東西言語文化交流 近代翻訳語の創造と伝播、2010 年、264

[産業財産権]

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

千葉 謙悟 (CHIBA KENGO)  
中央大学・経済学部・助教  
研究者番号：70386564

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：